

プレイバックシアターによる実習の振り返り

古山千佳子（県立広島大学 作業療法コース，劇団しましま）

背景：本学作業療法学コースの学生は，3年次に地域の施設や病院で2～3週間の学外実習を経験する。その後，学内で事例報告会とプレイバックシアター（以下PBT）を用いた実習セミナーに参加し，実習経験を振り返る。

目的：PBTを用いた実習セミナーの内容と学生の反応を振り返り，PBTが学生に与えた影響を探る。

方法：2014年～2024年に実施した計9回の実習セミナーの内容をまとめ，学生のストーリーを内容ごと分類して名前を付けた。また，2019年，2020年，2023年，2024年の参加者118名を対象としたアンケートの結果を集計した。自由記載の感想は文脈を意識してコード化を行い，各コードの共通性や関連性により集めてカテゴリーを抽出した後，カテゴリー間の関係性を説明する関係図を作成した。

結果：

合計268名の学生（1回平均29.8名）と42名の教員（1回平均4.7名）が実習セミナーに参加した。以下にPBTを用いた実習セミナーの内容，学生が語ったストーリー（表），アンケートの結果（図1），自由記載のカテゴリー間の関係図（図2）を示す。

実習セミナーの内容：1回約3時間で実施し，PBTのトレーニングを受けた教員がファシリテーターを務めた。最初にウォームアップを目的としたエクササイズ（マッピング，「ハッ」まわし等）と演じる練習を行った。その後，2014年～2019年では，ファシリテーターがコンダクターとなって学生からテラーを募り，学生と教員がアクターとミュージシャンとなってストーリーを演じた。2020年以降は，学生はテラーとしてストーリーを語るのみで，教員がアクターとミュージシャンを行った。

表. 学生が語ったストーリー（32種類）

名前（数）	ストーリー
クライアントの作業（9種類）	「いつもは元気のないクライアントだが，カラオケをしている時の表情は明るく活き活きしていた」「全く動こうとしないクライアント。好きな編み物をする事で動き始め，作品の完成を看護師に嬉しそうに話した」他7種類
クライアントとの関係性（8種類）	「課題が多く不安な日々だったが，利用者の笑顔に救われた」「クライアントにおやつを食べよう勧められた。ありがたいが食べる訳にもいかず困った」他6種類
作業療法士の実習指導（6種類）	「実習前に白衣は不要と言われたが，今さらジャージと言われても困る」「家族を亡くし，死にたいと話すクライアント。指導者の言う通り，冗談を交えて話をしたら表情が良くなった」他4種類
クライアントとの関係性の変化（4種類）	「無理してごはんを食べている利用者に，全部食べなくて良いと声をかけたら利用者の表情が明るくなった」「黙々と機能訓練だけに取り組む利用者。熱心に取り組んでいることを話題にすると話がはずんだ」他2種類
COPMの実施（3種類）	「ある利用者にはCOPMができたが，別の人では上手くできず，気まずい空気になり終了した」「何もしたくないと言うクライアント。COPMをしているうちにやりたいことが見つかり，できるようになっていった」他1種類
スタッフとの関係性（1種類）	「コードが壊れていることを知らないスタッフが無理に繋ごうとした。普段から厳しく接してくるそのスタッフに，何も言えなくてもやもやした」
実習への疑問（1種類）	「実習が終わり，自分なりに充実した実習だと思っていたが，友達の実習を聞いて自分の実習に疑問を感じた」

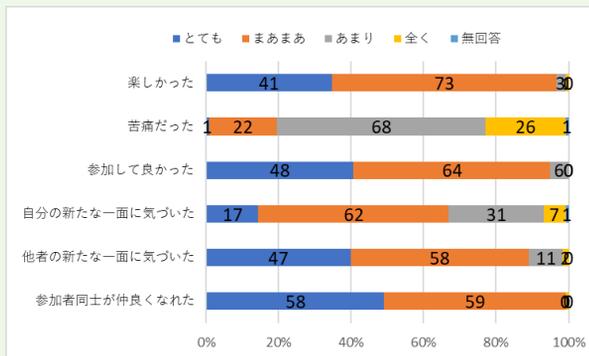


図1. アンケートの結果 (n=118)

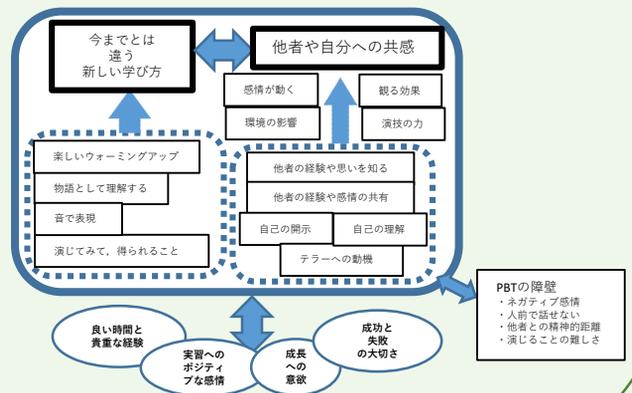


図2. 自由記載のカテゴリー間の関係図

考察：

PBTを用いた実習セミナーでは，事例報告会では知ることのできなかった貴重なストーリーが語られた。アンケート結果から，学生の約9割が「楽しかった，参加して良かった」と感じていた。学生は，今までは違う新しい学び方を通して他者の経験や感情を知り，自分の経験を振り返ることで他者や自分に共感していた。その一方で，約2割の学生がPBTを苦痛だと感じており，人前で話したり，即興で演じることにネガティブ感情を抱く自発性の低い学生も存在した。クライアントの生活や作業に関わる作業療法士にとって共感性や自発性は必要な要素である。今後もPBTを用いた実習セミナーを続けると同時に，その他の授業にも取り入れていきたい。